

岡山

PCR検査は生活に大きな影響 人権の視点からも拡充を

人権岡山が岡山市と緊急懇談

地域人権運動岡山市連
絡会(人権岡山)は7月
30日、岡山市市民協働局
と懇談を行いました。人
権岡山から田中金一代表
ら三役が対応し、中島純
男県人権連議長が同席。
行政側から亀井良幸局
長、中西信行次長など5
名が出席しました。

積年の課題である岡山
市の部落問題解決の到達
点の認識について亀井局
長は「結婚問題やインタ
ーネットなど差別意識の
解消が課題」とこれまで
の考えを述べるに留めま
した。

しかし近年、市への結
婚相談はありません。実
態ではなく市民の「差別
意識」を理由に特別視す
る政策を取り続けていま
す。岡山市が「差別意
識」を根拠づける「人権
問題に関する市民意識調
査」でも、回答を誘導す
る恣意的な設問だと指摘
しました。

岡山県では同様の意識
調査を整理し、結婚の
文言を削除
した状況を
伝え、「市
も人権課題
全体の中
で、部落問
題の位置付
けを整理す
る時期では
ないか」
と。コロナ
対策なども
追及しまし
た。



挨拶にたつ田中金一・人権岡山代表

全水100周年を迎え、考えること⑤

人見亨と未発の 「徹底的融和教育」

部落問題研究所理事 梅田 修



戦前、部落問題の解決
にかかわって組織された
教育は融和教育と呼ばれ
ていた。融和教育は、全
国水平社の創立(一九二

二年)とその運動の発展
に対応して支配者側によ
って発想された教育で、
一九二七年〜一九二八年
頃に成立した。融和教育
は、一九三七年の日中全
面戦争の開始とそれに伴
う戦時体制の急速な確立
という事態にファッショ
的に変質させられ、文部
省『国民同和への道』
(一九四二年)の発刊以
来、同和教育という名称
に変えられた。

同和教育は、「同胞一
和」の名のもとに部落住
民をいっそう徹底して侵
略戦争に動員するため
に、まさに「戦場におけ
る平等」―基本的人権を
侵害することにおいて
「平等」な道を追求する
教育であった。

こうした融和教育と關
った教員の一人が、人見
亨(一九〇四〜一九六四

年)である。人見亨は、
『新興教育京都支局』の
活動家、田中部落での
「養正少年団」の組織者
・指導者として知られて
いる。「養正少年団」の
活動と意義については、
小川太郎「田中子ども会
覚え書き」(『部落』一六
五号、部落問題研究所、
一九六三年)／梅田修
「人見亨の思想と実践―
『養正少年団』によせ
て」(部落問題研究所編
『京都の部落問題2―近
代京都の部落』一九八
八年)を参照されたい。

ここでは、人見亨が構
想した「徹底的融和教育」
にふれる。人見亨の遺品
の中から「ノート」(一
九三六年執筆)が見つか
った。「ノート」には表
題はないが、その内容と
未発表であることを考慮
し、ご遺族の了解を得て
「被庄迫部落解放の為に
必要なる体系的知識及び
技能を把握させる事をも
つて目的とする所の教育
上の方策」であると定義
し、部落のある小学校で
は、「教師は科学的態度
をもって臨み、科学追
及の小戦士を養成する決
心を持つべき」こと、部
落をもたない小学校で
は、教師は「各教科教材
を百パーセント唯物論
的、科学的に取扱」うこ
と、水平社の組織した少
年部では、「極左的アジ
プロ、観念的宣伝活動を
徹にいましめ、児童本来
の童話や遊戯等に対する
好みをよく指導者は理解
せねばならぬ」ことを提
起している。戦後の民主
的な同和教育の構想につ
ながる萌芽を読み取るこ
とができ、戦前の到達点
として注目すべき主張で
ある。



被爆者と対話しながら描く

コロナの影響で平和行
進もオンラインで創意工
夫を凝らして行われまし
た。6・9行動での署名
活動など核兵器禁止を求
める行動は各地域で取り
組まれていきます。また、今
年も横須賀市市民活動サ
ポートセンターで原爆展
が7月11日から8月7日
にかけて行われました。
広島市立基町高校の生
徒の皆さんが被爆者の体
験を聞き取り描いた「原
爆の絵」(複製)が展示
されていました。8月7
日には「あの日を描く」
高校生たちのヒロシマ」
DVDも上映されまし
た。(横須賀支部)

神奈川

被爆75周年 核兵器禁止条約へ参加を

地域人権 俳壇

秋潮に 神酒撒き鯨 追込漁 赤松由美子
天高し 庭の手入れを 妻がせり 沼倉 輝代
鈍行の 長き停車や 秋の暮 木皮 慧子
解凍の 表示確かめ 秋刀魚買ふ 岩本 立彦
無縁墓 縁なき虫が 来て鳴けり 赤松 徳三
水中花 三密ゆるるぶ 気配なし 吉坂八重乃
稲田風 コロナ退治の 風となれ 岸本 守

(編集部) 読者・会員の方々の投稿を
お待ちしております。

書籍案内

朝日新聞社 朝日新聞の慰安婦報道と裁判

北野隆一 著

2015年1月から2月にかけて、朝日新聞社に対する集団訴訟が右派3グループから相次いで起こされた。きっかけは2014年8月5、6日に掲載された「慰安婦問題を考える」と題した特集記事。戦時中の朝鮮・濟州島で、女性を慰安婦にするため強制連行したとする吉田清治氏(故人)の証言を「虚偽」と判断し、記事を取り消したことで、批判が高まった。

14年8月の特集記事の取材班に参加し、その後も慰安婦問題の取材を続ける記者が、朝日新聞の報道と、これに対する保守・右派の批判を訴訟の経過に沿う形で記していく。さらに、社外有識者による「第三者委員会報告書」や「米国での慰安婦像撤去訴訟」「植村隆・元朝日新聞記者の訴訟」についても詳報。朝日新聞の慰安婦報道が日韓関係や国際社会に与えた影響とは。そして戦後75年を経てもなお、置き去りにされる慰安婦問題の本質とは。克明な記録をもとに徹底検証する。



定価/1900円(税別) 判型/四六判
頁数/552ページ
発売/朝日新聞出版 ISBN978-4-02-263098-8